



# 開国を支えた横浜眞葛焼 ～宮川香山 眞葛ミュージアム を訪ねて～

吉田 英弘

## 1. 眞葛ミュージアムへ

12月初旬、横浜駅にほど近いヨコハマポートサイド地区にある、宮川香山 眞葛ミュージアムに行ってきました。宮川香山は明治～大正期に活躍した陶芸家です。数多くの作品を海外に輸出し、その超絶技巧的作品は世界で絶賛されました。「明治期に製作されたやきもので、日本の重要文化財は幾つあるかご存知ですか？たった2点、しかもいずれも香山の作品なんです」こうして館長の山本博士氏にわかりやすく解説をしていただきました。



図1 館内のようす

## 2. 眞葛焼の魅力

まずはその作品をご覧ください。図2は宮川香山が産み出した、高浮き彫りと呼ばれる陶器です。まるで彫刻のような、精緻な動植物が器の表面に盛ってあるのが特徴です。実際目の当たりにすると、その生き生きとした動植物の描写力に圧倒されます。図3は明治14年頃から作り始められた磁器作品の一つです。高浮き彫りの豪華な装飾美から一転して、釉下彩を使い、シンプルで優美なフォルムへと変遷していきます。図4は山本館長によればアールヌーヴォーの影響が窺え、図5は遺作の一つとされており、雅致に富む作品を好んだとされる宮川香山らしい、研ぎ澄まされた名品です。

## 3. 宮川香山の生涯

香山は天保13年(1842年)、京都・真葛原の陶工の家系に生まれました。19歳で家業を継ぐとその高い作陶技術が評判を呼び、そして明治4年(1871年)、横浜・太田村に眞葛窯を開窯して海外輸出のための作陶を始めます。香山は薩摩焼をはじめ日本各地の伝統技術や素材を積極的に吸収し、やがて高浮き彫りという新たな技法を産み出しました。これが欧米で高く評価され、明治9年(1876年)のフィラデルフィア万国博覧会での受賞以降、30年以上に亘り海外の愛好



図2 葡萄鼠細工花瓶

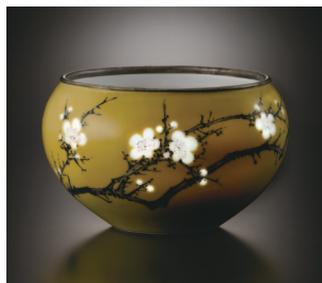


図3 磁質黄地透梅図鉢

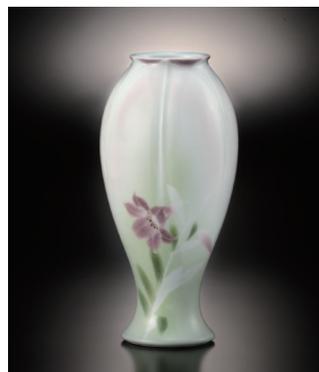


図4 磁製花形花瓶

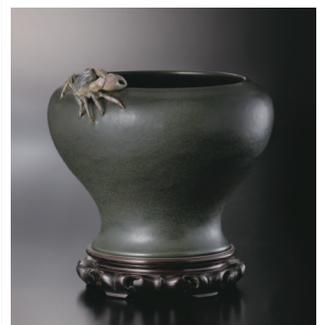


図5 琅玕釉蟹付花瓶

家の注目の的となりました。

英国のインダストリアルデザイナーの草分け、クリストファー・ドレッサーの著書には「眞葛焼は称賛に値し、その手法においてこれを超越るものは存在しない」とあります。欧州では産業革命以降、公害が社会問題化する中で、香山の精緻な自然描写や花鳥風月が人々の心をとらえたのではないのでしょうか。アール・ヌーヴォーや世紀末ウィーンにおけるジャポニズムの影響は周知のことですが、香山の仕事が欧州にもたらした影響は相当なものであったであろうことが伺えます。また、眞葛窯を訪問した米国のエリザ・R・シドモアは、1898年の「HARPPERR'S WEEKLY」紙において「コペンハーゲンの陶芸家は太田の魔術師（香山のこと）のこの作品をこぞって真似ようとしたものである」と述懐しています。

明治中期に香山は半之助（後の二代目宮川香山）に家督を譲り、自らは釉薬研究に没頭します。ここでも香山は釉下彩の技術を極め、海外から絶賛される作品を製作し続けました。ここで我々が忘れてはならないのは、当時、陶磁器は日本にとって外貨獲得のための輸出基幹産業であり、また日本文化を海外に発信する役割をも担っていた、ということです。つまり開国というこの国の重要なステップを力強く踏むために、香山のような第一級の手仕事が必要な時代であったのです。香山は時代とともに変化する欧米の嗜好や芸術・文化をも吸収し、高い技術力をもってこれらの役割を果たしたといえます。

#### 4. 幻のやきもの

二代目宮川香山にも確かな技術は受け継がれました。図6、図7は二代目宮川香山の手によるものです。例えば図7は、福の神と慌てて身を隠す鬼とをあしらった灰皿で、青磁の福の神と暗褐色の鬼のコントラストがすばらしく、またとてもユーモラスな作品です。宮川香山は三代まで続きましたが、太平洋戦争末期の横浜大空襲ですべてが失われてしまいました。こうして横浜眞葛焼は名品の多くを海外の輸出先に残したまま「幻のやきもの」となったのです。

情報収集力と時勢を見抜く判断力、自然への確かな観察眼、豊かな発想とそれを的確に形にする世界最高の技術力…そのすべてが備わった陶芸家であり、明治以降、日本の近代化に大きな貢献を果たした宮川香山。この偉大な先達は、激しく移り変わろうとする現

代を生きる我々に勇気を与えてくれる存在ではないでしょうか。皆さんにも是非一度、ミュージアムに足を運ぶことをお勧めしたいと思います。末筆乍ら、写真のご提供をはじめ、今回の取材に惜しめない御協力を賜りました山本博士館長に篤く御礼申し上げます。

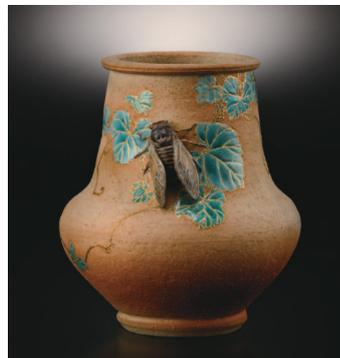


図6 古伊賀意蟬付花瓶



図7 眞葛窯福内鬼外灰皿



図8 スタッフの皆様と、ミュージアム前にて（中央左：山本博士館長，中央右：筆者）

■宮川香山 眞葛ミュージアム <http://kozan-makuzu.com/>

■筆者紹介 吉田 英弘

東京大学助手を経て2008年より(独)物質・材料研究機構 主幹研究員。

[連絡先] 〒305-0047 茨城県つくば市千現1-2-1 (独)物質・材料研究機構 E-mail: YOSHIDA.Hidehiro@nims.go.jp

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]